

# 國學院大學學術情報リポジトリ

棚田保全と伝統行事との関係について：  
熊野市紀和町の「丸山千枚田の虫おくり」を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-10-22 キーワード (Ja): 虫送り, 棚田, ライトアップ, 伝統行事, 観光 キーワード (En): 作成者: 近藤, 貞祐, Kondo, Teiyu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000961">https://doi.org/10.57529/0002000961</a>

# 棚田保全と伝統行事との関係について

—熊野市紀和町の「丸山千枚田の虫おくり」を事例として

**The relationship between terraced rice field conservation and traditional events:**

**“Maruyama Senmaida Mushi-Okuri” held in Kiwa-cho, Kumano City as an example**

近藤 貞祐

キーワード：虫送り 棚田 ライトアップ 伝統行事 観光

关键词：送虫 梯田 灯光照明 传统活动 观光

## 要旨

熊野市紀和町丸山地区の棚田「丸山千枚田」では、毎年6月初旬の田植えが終わった時期に伝統行事「丸山千枚田の虫おくり」が行われている。この行事は、夕暮れ時から棚田の枚数と同じ1340本のキャンドルが棚田の全域に灯し、同時に伝統的な虫送り行列が「虫おくり殿のお通りだい」の掛け声とともに棚田の畦道を練り歩き、害虫駆除と稲の実りを祈願するというもので、行事の際にはその光景を一目見ようと地域外からも多くの人々が訪れる。本稿は、この虫送り行事が併せ持つ伝統行事と観光という二つの側面が、棚田の保全に対してどのような役割を担い現在まで継承されているのかについて、検討を行うものである。

論中においては、先行研究、現地調査の内容を中心に勘案し、虫送り行事の持つ観光的側面が、棚田の認知度の向上と棚田保全の主要な取り組みである「棚田オーナー制度」加入を促し、一方の伝統的側面が、棚田の保全活動と行事の継承に欠かす事のできない地域の結束に大きな役割を担っていることを主に指摘した。

## 摘要

在熊野市紀和町丸山地区的“丸山千枚田”梯田，当地居民每年都会在6月上旬插秧结束的时候，举办名为“丸山千枚田送虫”的传统活动。该活动一般是从傍晚开始，由居民在整个梯田里点燃与梯田数量相同的1340根蜡烛。传统的送虫队伍伴随着“送虫殿下走过去了”的吆喝声，在梯田的田埂上游行。这是为了祈求驱除害虫和五谷丰登而举行的活动。除当地居民之外，也会有很多外地人专程到访，观看此一活动。本文对该送虫活动做一考察，指出其所具有的两个特点——传统性与观光性，并对此一活动在梯田保护方面所发挥的作用以及传承至今的情况做一论述。

本论文结合以往研究成果和实地调查内容，得出结论认为：送虫活动具有观光性特点，因而提高了人们对梯田的认知，并促使人们加入有利于梯田保护的“梯田所有者制度”；另一方面，传统性特点有益于维系地区凝聚力，从而对梯田的保护以及活动的继承发挥着至关重要的作用。

## 序

棚田は、かつて平野が少ない山間部や海岸部の食料自給に貢献し、現代では景観や生物多様性の保持に大きな役割を担っている。しかしながら、1枚毎の面積が小さく、傾斜地で労力がかかるだけでなく、現代における過疎・高齢化も伴い、多くの地域で耕作放棄による荒廃地が拡大している。この問題を打開すべく、各地の棚田ではオーナー制度や地域おこし協力隊、ボランティアなど外部からの協力要請、棚田米の販売、農泊、キャンプ地の提供など様々な施策が行われている。中でも棚田景観の文化的価値を観光資源として利用することで、地域の活性化や棚田の認知度を高め、棚田の保全に繋げようとする動きが国内外の多くの地域で見られるようになってきている。

2000年代以降における棚田景観を利用した代表的な取り組みは棚田のライトアップであるだろう。棚田のライトアップは、夕暮れ時から夜間に行われ棚田の広範囲にロウソクや竹灯籠、LED電飾を灯すことで棚田の高低差を利用した美しい夜景を演出するものである。この取り組みは、昨今のSNS（ソーシャル・

ネットワーキング・サービス）の普及も相まり、棚田景観を活用した観光イベントとして注目を集め、観光客の誘致に大きな成果をあげている事例も多くある<sup>(1)</sup>。

熊野市紀和町丸山地区の丸山千枚田では、毎年6月初旬の田植えが終わった時期に伝統行事「丸山千枚田の虫おくり」（以下「丸山虫送り」という。）が行われている。丸山虫送りでは、夕暮れ時から棚田の枚数と同じ1340本のキャンドル（呼称はキャンドル、または松明。本稿ではキャンドルと統一する。）が棚田の全域に灯される。そのライトアップの光景は、標高の高い山間からの展望も相まって大変壮観なものであり、行事の際に



写真1 熊野市の観光パンフレットの表紙。丸山千枚田の風景が全面に使用されている。

は毎年多くの観光客や写真家が訪れる。その様子は熊野市の観光ホームページ、パンフレットでも取り上げられているが、この丸山虫送りが他地域の棚田のライトアップと一線を画す点は、これが本来的には「虫送り」という伝統行事であり、必ずしも観光客の誘致を目的としたイベントではないという点である。丸山虫送りは丸山地域において伝承され、ある時期に途絶えたが、熊野古道が「紀伊山地の霊場と参詣道」として平成16年(2004年)に世界遺産に登録された際に、記念イベントとして復活した。行事では、棚田のライトアップと同時に伝統的な虫送り行列が「虫おくり殿のお通りだい」の掛け声とともに棚田の畦道を練り歩き、害虫駆除と稲の実りを祈願する。

丸山千枚田は、その雄大な景観もさることながら、先進的な保全事業の取り組みが高く評価されている全国でも有数の棚田であり、棚田研究の領域においても早期から注目されていた。畑地灌漑・棚田研究の第一人者である中島峰広が最初の研究対象として扱った棚田もこの丸山千枚田であり、中島は同地において棚田の形状や農法、保全方法など複数の視点から詳細な調査、研究を行った<sup>(2)</sup>。中島の研究以降も丸山千枚田は、水利システムやオーナー制度の面では注目されてきたが、一方で保全事業としての観光施策と、その名を冠し長らく行われている伝統行事・丸山虫送りとの関連性については、今日に至るまで論じられてこなかった。

本稿は、まず文化的景観としての棚田景観が観光資源としてこれまでどのように扱われてきたか、そこから棚田景観の活用から発展した棚田で行われる行事やイベントの先行研究について検討する。そして近年実践されている具体事例として、丸山千枚田における伝統行事であると同時に観光資源としても活用されている丸山虫送りの継承の動態から、行事がどのような意味を持ち棚田の保全活動における役割を担っているか、また他地域で行われている棚田ライトアップイベントとどのような差異があるのかについて検討し、棚田における伝統行事と観光の両軸における研究の一端となることを目的するものである。

## 1 先行研究の検討—棚田景観と観光

### (1) 棚田と文化的景観

農村景観および棚田景観に文化的な関心が持たれ、整備施策が行われるように

なったのは80年代以降のことである。岡橋秀典は、その背景には国家財政の緊縮のため、農村の多くが自治体による内発型の地域振興、いわゆる「村おこし」に転換されるようになり、経済面でも工業より観光、リゾート開発などのサービス産業が重視されるようになったことによるものだと指摘している<sup>(3)</sup>。平成15年(2003年)に文化庁によって「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究(報告)」がまとめられた。その調査の対象は「水田、畑地、森林、漁場などの土地利用に関する景観や気象、習俗・行事によって現われる風土に関する景観、伝統的産業及び生活を示す文化財の周辺の景観」であった。その後の平成17年(2005年)には、「文化財保護法の一部を改正する法律」が施行され、「文化的景観」が文化財の新たな一類型として法的に位置付けられた。この文化的景観とは、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域における風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業を理解のため欠くことのできないもの」と規定されているもので、今日の棚田研究において非常に重要な概念として捉えられている。その後の二次調査では、180か所が重要地域に選定され、水田景観は35か所、そのうち22か所が棚田景観であった。中島峰広は農山漁村の文化的景観の中で、棚田景観は他に先駆けて関心を集め保全の取組みがなされていたと述べており、その理由を「棚田景観自体が農村景観のなかで日本人の原風景といわれ、特別なものとされるからである」としている<sup>(4)</sup>。また、棚田景観を保全する取組みに結びついた要因として、平成4年(1992年)の全国棚田(千枚田)サミットの開催、平成11年(1999年)の農水省による「日本の棚田百選」の認定、棚田学会の設立、海外におけるフィリピン・コルディレラの棚田の世界遺産登録など、棚田に対する関心を高めた一連の動きを挙げ、のちの国の直接支払制度による棚田の耕作助成、都市住民が経済的な支援を行う棚田オーナー制度のひろがりなどを生み出したとしている。春山・三浦はこれらの動きにより「それまでの棚田に対する認識は大きく覆された」とし、平成4年(1992年)以降の「美しい日本のむら景観コンテスト」などの外部評価を契機に、「棚田のもつ文化的景観は棚田の公益的多面的機能保全への動きと一体化し、大きく社会的評価を受けるようになった」と述べている<sup>(5)</sup>。

## (2) 棚田と観光

中島は棚田景観の文化的価値について、棚田を構成する要素、変遷、地域ごと

の具体事例から整理を行ない、「棚田景観は、第一主体者の眼からみた生活的風景のうえからも農村の美化を意識するようになった圃場整備等の農村開発計画において、重要視されるべき構成要素であるとともに、第二次主体者の眼からみた探勝的風景のうえからも貴重な観光資源である」としている<sup>(6)</sup>。棚田保全への動きが活発になった90年代前半から、既に棚田景観の美しさを広く認知させ、観光客を誘致する取り組みや顕彰の事業は行われていた。平成7年(1995年)には、高知県原町で「第1回全国棚田サミット」が開かれたおりに、全国棚田連絡協議会などが主催者となって「棚田フォトコンテスト」が実施され、この際の募集に対しては全国から1200人、2677枚もの応募があった<sup>(7)</sup>。現在においてもこのような棚田景観を題材としたフォトコンテストは全国各地の棚田で実施されており、棚田を扱った取り組みの中では主流なものの一つになっている。

また、平成11年(1999年)には「日本の棚田百選」の認定が行われた。この取り組みは、都道府県からの推薦に基づき設置された委員会における意見を踏まえ、全国117市町村に所在する合計134カ所の棚田が認定されたものであり、認定を受けた多くの地域にとって棚田を用いた観光化促進のきっかけとなるものであった。本中眞は『日本の棚田百選』は、生産地としての棚田が持つ多様な価値のうち、特に農村観光の資産の観点から、グリーンツーリズムの一環として取り組まれたものでもあった。これを契機として、多くの人々が四季の変化に彩られた美しい風景を求めて各地の棚田を訪れるようになった<sup>(8)</sup>。棚田景観を活用した観光の事例として、稲垣栄洋らは、百選に指定された静岡県内の5地区の棚田を調査し、棚田からの眺望や水流の構造を生かした棚田ならではのグリーンツーリズムによる観光展開を報告している<sup>(9)</sup>。また小林駿司らは、東京から一番近い棚田として観光地化している現状にある千葉県鴨川市の「大山千枚田」を調査し、住民の多くが棚田に対して文化的価値、景観的価値、観光資源的価値を認識している一方で、観光化による観光客や観光業者のマナーの問題が弊害として発生している問題を指摘している<sup>(10)</sup>。また、大澤啓志らは、岸段丘沿いの小規模な棚田・段畑跡地を公園にして、ヒガンバナの群生地化を図り観光資源としようとしている栃木県那須町菘沢地区を事例に、耕作放棄棚田に景観植物を植栽し、その開花景観を観光のための地域資源として地域活力に結び付ける「畦畔法面」の植生の実態把握を行なった<sup>(11)</sup>。これらのように棚田観光は、顕彰事業に端を発した、主に棚田景観と農村空間を主体としたグリーンツーリズムなどの観点から

は、比較的多くの検討と報告がなされてきている。

### (3) 棚田で行われる行事、イベント

棚田学会理事・山路永司は「棚田の集客力向上のために、ある短期間のイベントが行われることが多い」と述べ、棚田アートやロウソクによるライトアップ、芸術祭、棚田の舞台化などの地域ごとの具体事例を挙げて、「稲作とは直接関係しないけれども、(中略)来訪者・地、双方にとって有益な関係づくりが目指されている」としている<sup>(12)</sup>。

棚田ライトアップの具体事例については、輪島市白米千枚田において行われているイルミネーションイベント、「あぜのきらめき」を山下博之が報告している<sup>(13)</sup>。このイベントは、平成19年(2007年)の能登半島地震による観光面での風評被害の払拭を目的として行われたキャンドルイベント、「千枚田あぜの万燈(あかり)」に端を発したもので、本来は一度限りのイベントであった。続けて見たいという観光客、観光誘客を期待する市内観光関係者から多くの要望が寄せられ、平成23年(2011年)、千枚田のあぜに12000個のLED電球を設置するイルミネーションイベント「あぜのきらめき」として再度行われ、「市内外から大勢の来訪があり、期待した以上の誘客効果を得ることができた」としている。このようなライトアップイベントを取り入れる地域は近年全国的に広がっており、認定NPO法人・棚田ネットワークが運営するホームページ「棚田NAVI」ではカテゴリズとして、「つなぐ棚田百選」「日本の棚田百選」に並び「ライトアップ」としてまとめており、近年における棚田を扱った取り組みにおいては主要な事業となっていることがわかる<sup>(14)</sup>。浅田大輔は、景観を活用した観光イベントとして棚田のライトアップの事例を挙げ、「美しい景観を見せるイベントにとどまる例が多いが、グリーンツーリズムやエコツーリズムなどと組み合わせ、棚田のある地域の文化や歴史、自然と触れ合うようなツアーにまでステップアップさせることが重要である」としている<sup>(15)</sup>。

以上のように、棚田保全を目的とした棚田を利用した観光施策は様々に研究、報告されているが、一方で現在までにライトアップをはじめとした棚田で行われるイベントや伝統行事と観光の関係性を主題とした論考は極めて少ない。このことを鑑み本稿では、熊野市紀和町丸山地区の丸山千枚田において実施されている、伝統行事・丸山虫送りが内包する伝統行事性とイベント性からなる観光的側

面を主に扱い、同地域の棚田保全との関連性について論じる。

## 2 紀和町丸山と丸山千枚田

### (1) 地域概要

#### 熊野市紀和町丸山

熊野市紀和町は三重県熊野市の南西部に位置する地域である。かつては隣接する三重県南牟婁郡に属する町であったが、平成17年(2005年)に郡より離脱、熊野市と合併し現在に至る。標高600～900メートルの山脈、熊野海岸山地を有し、峡谷と穿入曲流の発達した北山川および瀨峡で有名な熊野川を隔て、和歌山県北山村、新宮市、および奈良県十津川村、東側では峠をはさんで、御浜町・紀宝町に接している。地勢は急峻な山岳部で林野率が89.3%と高く、耕地の大部分が山腹の斜面に散在している。気候は熊野灘が近いことから比較的温暖で、年間降水量は3000ミリ程度と多雨地帯である<sup>(16)</sup>。かつては紀伊半島随一の巨大鉱山と言われた「紀州鉱山」があり基幹産業として興隆したが、昭和53年(1978年)に鉱山の閉山により減少傾向が加速し、町内の人口は、昭和15年(1940年)の10320人をピークに減少を続け、令和4年(2022年)現在においては974人と過疎化・高齢化が進んでいる。その紀和町の中央部に位置し丸山千枚田を有する丸山地区は、面積は2.3平方キロメートルほどの地域であり、人口の65歳以上の占める割合が60%を超えている典型的な高齢者集落である。地勢は南西向きの斜面を埋め尽くすように棚田が広がり、その棚田を望む位置に集落が点在している。交通の便は悪く、市の中心部にある市役所から約25km、自動車で約30分の時間を要する。

### (2) 丸山千枚田

丸山千枚田は、丸山地区南西斜面の標高140～290メートル地点に段々につくられた、1340枚、約7.2ヘクタールに及ぶ国内最大規模の棚田である。農林水産省より平成11年(1999年)に「日本の棚田百選」、令和3年(2021年)に「つなぐ棚田遺産」に認定されており全国有数の棚田として知られている。この地区に水田が造成された時代は不明だが、慶長5年(1600年)の関ヶ原合戦後に浅野幸長氏が紀伊国に入封し、翌年の慶長6年(1601年)に領内一斉の検地を実施した際には、7町1反8畝(約71,205㎡)2240枚の水田があったとの記録がある<sup>(17)</sup>。史料に





写真2 丸山千枚田

よると、「どのように小さい田でも造り、一粒の米でも多く収穫したいとの考えから、労力を惜しまず一掘っては石を積み、石を積んでは土を埋めながら造成したもので、江戸時代以降も条件が悪い土地でも猫額の地を開墾した」とある<sup>(18)</sup>。この石積みによる造成は丸山千枚田の大きな特徴であり、これは各層が横に通っている「整層積み」と

呼ばれる積み方であり、布積みとも、練瓦積みともいう。丸山千枚田は全国でも有数の優れた棚田として著名で、これまでに多くの研究、調査の対象として、また棚田保全の優良事例の対象としても扱われてきた。中島峰広は「名実ともに千枚田とよぶに相応しい景観が作りだされている」としており<sup>(19)</sup>、また、真島俊一は棚田の造成について同地を「苦労の塊のような場所」と評している<sup>(20)</sup>。

### 荒廃と復田活動を支える組織

江戸中期以降も開墾を続けた結果、明治時代には約11.3町歩(113,000㎡)まで面積が拡がり、その後昭和30年代まではほぼそのままの姿がとどめられていた。しかしながら、以降の日本経済の高度成長による若年層の都市部へ流出、後継者不足が生じたことに加え、昭和40年代半ばから始まった稲作転換対策による杉の植林や減反政策、更に昭和53年(1978年)の鉱山の閉鎖も重なり、それまで主に鉱山労働者の兼業により維持されていた棚田は耕作放棄が進み、平成初期には530枚、約4.6ヘクタールまで減少した。

「先祖から受け継いだ千枚田を復元したい」という地元住民の熱意と、「荒れる一方の貴重な地域資源である千枚田を復元することにより地域振興を図り、地域活性化につなげていきたい」と考える熊野市(旧紀和町)との思惑が一致し、平成5年(1993年)4月1日に市(旧町)が出資を行い、農林産物の生産・加工・販売、観光資源の開発、農地保全等を目的として「一般財団法人熊野市ふるさと振興公社」(旧財団法人紀和町ふるさと公社)の設立を行い、また同年の8月23日には

丸山地区全31戸で構成する「丸山千枚田保存会」が発足し、市を含めた3団体による千枚田復元へ向けての連携体制が整えられた<sup>(21)</sup>。平成6年(1994年)には、千枚田を貴重な文化資産ととらえ、市・市民が一体となって景観の保護に努めるとともに、有効に活用することによる「ふるさとづくり」に資することを目的とした独自の「丸山千枚田条例」を制定している。

丸山千枚田の維持・管理の方式は「交流共生型」とされるシステムであり、その先駆者的存在である<sup>(22)</sup>。復田された水田を中心とした維持・管理を行うとともに、地元以外の三重県内、外の地域住民を水田オーナーとして募集して、棚田での農作業体験や、棚田の維持・管理のための資金確保を行い、丸山地区農家が丸山千枚田保存会を設立し実質的な農作業や棚田保全の役割を担っている。中島峰広は自身が踏査を行った平成11年(1999年)の時点で、このような丸山地区を棚田保全の取り組みについて他地域と比較し、「現状維持・交流共生型」として位置付け、その内容を「町が条令を施行し、地域振興の一環として千枚田の保存に乗り出しており、役所主導により地区住民で構成される千枚田保存会の構成員である農家が作業に従い、棚田の復田と維持経営が図られている」と説明している<sup>(23)</sup>。長年の復田作業により、平成6年(1994年)には550枚、翌年には840枚、その翌年には1050枚、そして平成9年(1997年)には現在と同じ1340枚、面積にして約7.2haまで復田した。

### 丸山千枚田オーナー制度

「都市住民との交流を深めることにより、一緒に千枚田を守っていこう」という趣旨のもと、平成8年(1996年)より「丸山千枚田オーナー制度」が開始された。現在は熊野市ふるさと振興公社及び千枚田保存会の管理田、4.5haのうち1.54haをオーナー田として活用している。管理田の中の町が指定した千枚田保護地区の耕作放棄地を、農地法の「特定の農地貸付に関する特例」に基づいて、農地所有者から無償で借入する契約を結び、これをオーナーに1年契約の貸付農地として提供する。

丸山千枚田の維持、管理に大きな貢献を期待されているこのオーナー制度は、参加者の増加が保全活動を左右するともいえるほど主要な取り組みである。オーナー参加者は初年度の平成8年(1996年)では68口で、おもに三重県労働者福祉協議会の関係者と大阪府内のデパートでの勧誘活動による応募者が大半を占め

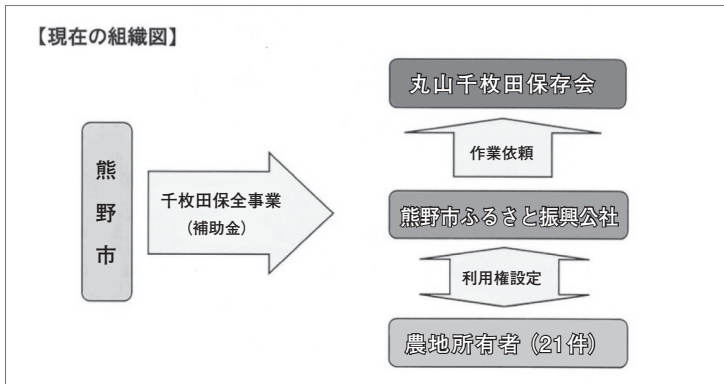


図1 丸山千枚田をめぐる組織図（熊野市ふるさと振興公社提供資料より）

た。その後インターネット等による広報活動もあり、三重・愛知・大阪のほか、東京都からの応募など、平成11年（1999年）には110口、445人にも達した<sup>(24)</sup>。

### 3 伝統行事「丸山千枚田の虫おくり」と観光

#### (1) 行事の概要

丸山虫送りは、棚田の田植えを終える6月初旬の時期に丸山千枚田において、地域の伝統行事として毎年行われている<sup>(25)</sup>。虫送りとはい、作物の虫害が深刻だった江戸時代に盛んに行われた田畑の作物の生育を害虫の被害から守るためのまじない、祈願の行事であり、現代においても全国の各地で行われている。丸山虫送りの由緒については「昔は、農薬等もなく、虫害になすすべがなかったことから、地域の子供たちがお寺でお札をもらい、松明と太鼓、鐘などを手に千枚田の中を練り歩き、火と音で害虫を追払うものでした。そこには、少しでも多くのお米を収穫したいという素朴な農民の祈りがこめられていました。ひと粒のお米でも多く収穫したいという農家の願いは、1614年の北山一揆に丸山地区の農民も加わっていたことから分かるように、山間地で農業を営む全ての農家の願いで、この虫おくりからもその思いが伝わってきます」と説明されている<sup>(26)</sup>。

丸山虫送りの方法は、棚田の枚数と同じ1340本のキャンドルを棚田の全域に灯すと同時に、行列で鉦と太鼓を打ち鳴らしながら「虫おくり殿のお通りだい」

の掛け声とともに棚田の畦道を練り歩くものである。行事の最後には、8月に行われる紀和の火祭りで見られる「北山砲」が2発放たれるのが恒例となっている。虫送りには住人以外の一般参加が可能であり、虫送行列に参加するには「虫おくり提灯」を購入する必要がある。この際には厄除けのお札がもらえる。虫送りの準備は当日の朝8時頃から始められ、棚田にキャンドルを並べたり、周辺交通整理などが行われる。キャンドルは約4メートルの間隔で1340個が全て人の手によって設置される。16時頃に円城寺と言う寺に参って祈祷を行い、例年夕暮れ時の18時頃から棚田に並べられたキャンドルの点灯作業が始められ、行事が開始する。19時頃に虫送行列が棚田の上にある丸山神社からスタートし、「大石」と呼ばれる巨石の付近までくんだり、農免道路を横断し耕作地を下方までさらにくんだり、周回するルートでゴール地点の水車小屋付近の受付テントまで1時間ほどかけ約1050メートルの畦道を練り歩く。行列の終了後は子供達にはお



写真3 丸山虫送りの行列



写真4 丸山虫送りのライトアップ



写真5 棚田に立てられるキャンドル



写真6 行事の最後に使用される北山砲

菓子が配られる。20時ごろにフィナーレとして北山砲の花火が2発放たれ、行事は終了となる。

丸山虫送りは昭和28年(1953年)まで実際に丸山地区で行われていたとされ、何らかの原因により1度途絶えている。熊野市、旧紀和町の市町村史によれば、紀和町内や周辺地域においても虫送り行事はかつて盛んに行われていたようである。隣接地域の西山地域について『南牟婁郡誌』には、「寺で『虫送り』の祈祷をうけ、各村落より各自1本の旗をもって行列をつくり、田のあぜ道を笛・太鼓・ほら貝を鳴らしつつ『虫もケラも出てゆけ』など虫送りにふさわしい歌をうたいながら、川辺までゆき、水ごりをして帰った」とある<sup>(27)</sup>。また「火送り」と称し、「夜間手に手に松明をもち、紙旗には『実盛様の通りで後日栄えん』と書き、『虫送り』と同じようなことが行われた」とも記されている。

## 運営組織

丸山虫送りは、主催を「丸山千枚田の虫おくり実行委員会(以下、虫おくり委員会)」、後援を丸山区、丸山千枚田保存会、紀和町ふるさと公社、熊野市が行なっている。虫おくり委員会の委員は五人程度で、会長と丸山千枚田保存会の委員や町づくり協議会の職員などが兼任している。全国で行われている虫送りの多くが行事として独立して行われていることに対して、丸山虫送りは実質的には棚田保全の人員により運営されており、このことから行事と棚田保全との密接な関わり合いがあることがわかる。留意しておくべき点としては、その実質的な活動を棚田保全団体とボランティアが担っているにもかかわらず、行事は棚田保全の一環として行われているものではなく、運営管理としては、あくまで独立した行事として市からの補助と他団体の支援を受けているということである。

## (2) 行事の性質

### 観光的側面

丸山虫送りは、平成16年(2004年)に熊野古道が「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されたことを記念して復活し、現在まで継承されている。丸山虫送り行事の発起人であり、現在は熊野市地域振興課の職員である浜中直人さんは、行事の復活当初の状況について「虫送りのことを古老に話を聞いていて地域を盛り上げるためにやろうと思った」と話し、これらのことから復活の契機と

なる事象が稲の不作等、本来の信仰と関連したものではなかったことが窺い知れる<sup>(28)</sup>。行事の観光化の展望があったかは不明であるが、当初は地域住民だけで行われる地域行事として行われていた。後に虫送りが観光化へと向かう訳であるが、その過程はキャンドルの本数からも見ることができる。復活当時の丸山虫送りは、地元の子供たちの「虫おくり殿のお通りだい」の掛け声とともに千枚田の豊作を願うという、かつて行われていた方法を再現したもので、キャンドル数は50本であった。その後の2009年(平成21年)にはキャンドルの数が大幅に増えて1000本に、翌年の平成22年(2010年)には松明の数が棚田の枚数と同じ1340本になる。このほか復活から10回目にあたる平成25年(2013年)には、観光大使の歌手によるコンサート、記念花火の打ち上げ、2019年(平成31年/令和元年)には「熊野古道世界遺産登録15周年事業」として、打ち上げ花火が行われた。行事の当日に配布される資料では、虫送りについて次のように紹介している。

平成24年からは、虫おくり行列への参加・メッセージキャンドルに参加・虫おくりボランティアスタッフでの参加と皆さん一緒に虫おくりを楽しんでいただけるようになりました。平成29年からは、棚田のキャンドルへの点灯にも参加していただき、一層楽しんでいただけるようになりました。(中略) このイベントを楽しみに訪れる方は年々増え1340本のキャンドルが揺らめく幻想的な風景、大勢の方と田んぼの中を練り歩く虫おくり行列は、丸山千枚田に夏の訪れを告げる風物詩として定着しています。

また、このキャンドルの本数が増えた経緯について、虫送り実行委員長の新谷進さんは「キャンドルを並べ始めることは他の地域の棚田でやっていたものを参考にして始めた」と、行事の変容について他地域のライトアップイベントに触発されたことを述べている。

### イベント性による集客、観光化の影響

前述の内容から運営側が現在の虫送り行事を観光資源と認識していることは明らかであるが、一方で浜中さんは「観光のためだけに行事をやっているわけではないが、虫送りの写真を見た人が千枚田のことを知ってくれるきっかけになれば」と思っている。それがオーナー制度に繋がれば一番いい」と話す。棚田オーナー

制度は参加者の増加が保全活動を左右するともいえるほど主要な取り組みであり、虫送りの参加についても当初は棚田のオーナーのためのイベントという側面があったようである。農林水産省「棚田キラーコンテンツ化促進ガイド」での丸山千枚田の項目においても、丸山虫送りについては「伝統行事復活がカギ／観光客を増やすことがオーナー確保ややりがいにつながる」と説明されている<sup>(29)</sup>。虫送り行事がオーナー制度の加入にどの程度の影響を与えているか正確にはわからないが、制度は現在においても全国各地から毎年100組を超える申込があり、田植えや稲刈りなどの農作業を通して、交流が図られている。また、調査を行った運営側の人物の多くが「虫送り(ライトアップ)を行っていることで注目されニュースやSNSなどを通じて棚田自体の知名度も上がっている」という実感を述べている。

### 行事に対する内外の認識

筆者は、令和5年(2023年)に行われた丸山虫送りを訪れ、現地調査を行った。到着したのは昼過ぎごろであったが現地はすでに見物人で賑わっており、棚田を見渡せる農免道路沿いには多くのカメラを構えた人々が連なっていた。筆者は行事が開始するまでの間にその場にいた人に訪問した目的や行事についての簡易なアンケート調査を行い、その結果が〈表1〉のようになる。この結果だけを見ても、行事を訪れる人々の関心はイベント性やそのライトアップの光景に向けられ

	A 夫婦	B 家族	C 女性	D 男性	E 夫婦
年齢層	30代	40代	20代	40代	70代
出身	愛知県	愛知県	三重県	三重県	奈良県
訪れた経緯、目的	棚田のライトアップ	棚田のオーナーをやっているが、コロナで来れなかったなので、子供に見せたいと思ってきた	SNSでライトアップを知って友人ときた	写真関係の雑誌でイベントを知って撮影しに来た	写真撮影が趣味で知り合いに教えてもらいイベントを撮影しに来た
虫送りの信仰について	知らなかった	概要程度は知っていた	知らなかった	知らなかった	趣旨は知っていた

表 1

ており、虫送りの信仰に対してではないということは明確である。

ここまでのことを概観すると運営側も虫送りを観光イベントとして行い、観光客側もそれを享受している関係性により行事が成り立っているようにみられる。しかしながら一方で、丸山千枚田保存会・会長兼虫送り実行委員会・副会長を務めている喜多俊夫さんは行事の実施について次のように話す。

虫送り行事は昔から続いている文化を大事にしたいという想いでやっています。コロナの時に途切れそうになったが、形はどうであれ継続しなければならないと思い、実行委員会としてキャンドルを灯すことはしなかったが、行列は数人で自主的に行っていました。なので、役場の事務局では2023年で17回目と記録しているが、やっている我々としては20回目という認識なんです。昔「大年まつり」というのをやっていたが雨で中止になった年以降は続かなくなってしまった。行事というものはやめると尻すぼみになって無くなってしまう。棚田も米作り自体が必ずしも目的ではなく、ふるさとを残したいと言う気持ちが強いです。

また、虫送り実行委員長の新谷さんも、「行事は基本的に雨でも行い、途切れず継続させようと言う意識が強い」と話した。運営側には観光化する狙いもあるが、同時に伝統行事としての認識も強く持っているのである。

### 他地域の棚田ライトアップイベントとの差異

丸山千枚田の「丸山虫送り」、先に挙げた白米千枚田の「あぜのきらめき」の他にも棚田をライトアップする行事、イベントは全国各地で行われており、認定NPO法人「棚田ネットワーク」が運営するホームページ「棚田NAVI」ではそれらを「ライトアップ」の項目で紹介している。これを主に参照し、作成したものが〈表2〉である。

ここには実際に開催の記録を確認できたイベントを、単発で行われたものも含めて記載している。この中で虫送り、儀礼的な要素を持つ行事として行われているものは、丸山千枚田の他では香川県小豆島の「中山千枚田」、京都府京都市の「越畑・檜原」の2箇所あるが、実質を伴った伝統行事として虫送りが行なわれて



棚田の名称	所在地	時期	行事名称、概要
1. 四ヶ村	山形県 大蔵村	8月第一土曜日	「四ヶ村棚田はたる火コンサート」約1200本のほたる火が灯る広大な棚田に、ピアノとオカリナの澄んだ音色が響き渡る。
2. 大山千枚田	千葉県 鴨川市	10月末	「棚田の夜祭り」
3. 寺坂	埼玉県 鶴瀬町	7月上旬	「寺坂棚田ボタルかがり火まつり」ろうそくとペントライト計600個を配置。平成19年から実施。
4. 坂折	岐阜県 恵那市	6月第1土曜日	「田の神様灯籠火祭」棚田の畦に約2000本のろうそくが灯される。
5. 白米千枚田	石川県 輪島市	10月中旬～翌年3月中旬	「あぜのきらめき」2万5千個以上の太陽光発電LEDを設置し毎晩棚田を浮かび上げさせる、イルミネーションイベント。
6. 稲倉	長野県 上田市	8月上旬	「しおど祭り」1000本以上のろうそくが稲倉の棚田を形取り、数100のたいまつが稲倉の棚田をゆつくりとねり歩く。年々敬慕が大きくなっていく秋の敬慕が鎮まることが折念し、稲穂の豊作を祈る。「はたる火まつり」と「棚田イルミネーション」が合体したか。
7. 上倉沢	静岡県 菊川市	3月下旬	「あざ遣アート」ろうそく1000本、LED1000本を使って幻想的な棚田の夜を演出。
8. 石部	静岡県 松崎町	5月27、28日	石火と呼ばれ、岩に神が宿るとして火を燃やして海上交通の目印とするなど、火に縁のある地区でこの故事にちなみ。
9. 平成	静岡県 富士宮市	3月中旬	「富士山白赤平成棚田竹灯籠祭り」地区内外の人々の農村交流の場として、3,776本の竹灯籠イルミネーション。
10. 御領	山梨県 甲斐市	6月中旬	「ろうそく祭り」田植えを終えたばかりの棚田が、約700本のろうそくの火で灯される。
11. 四谷の千枚田	愛知県 新城市	6月第1土曜日	「お田植え感謝の夕べ」千枚田を眼前にその作業道や畦畔に600本のろうそくを灯しながら、田植えの労をねぎらいい懇親を深める目的で始められた。
12. 丸山千枚田	三重県 熊野市	6月上旬	「丸山千枚田のおおくり」昭和28年まで丸山地区で行われていた稲作の害虫駆除と豊作を願う伝統行事で、熊野古道が夏芽遊歴に登録されたことを記念して復活。夜は蛙道に1340本のろうそくを灯す。
13. 深野のだんだん田	三重県 松阪市	10月の第4土曜日	「深野棚田まつり」夏明地区の棚田の畦におよそ4000本の竹灯籠を設置し、コンサートや地元産物の販売と振る舞いもある。
14. 越畑・樺原	京都府 京都市	8月下旬	「岩陰竹灯籠」棚田に約300本の竹灯籠を灯し、昔の虫送りの風習を再現。
15. 下赤坂	大阪府 千早赤坂村	11月中旬	「棚田夢灯り」3,000個の灯籠を並べる。有料。
16. 圃島	和歌山県 有田川町	毎年9月6日	「キャンテラライトイルミネーション」窓仁さま（悠仁親王）の誕生日に行われる。
17. 大井谷	高根県 吉賀町	10月中旬～11月	「大井谷棚田ライトアップ」2800本のLEDライトによるライトアップ。
18. 中山千枚田	香川県 小豆島町	7月上旬	「中山虫送り」稲の害虫を追い払い豊作を祈願する伝統行事。虫送り行列が棚田の畦を練り歩く。稲刈りが終わったから1日限定で1,500本のろうそくで棚田を彩るキャンテラライトアップが行われる。
19. 堂の坂	愛媛県 西条市	10月下旬 不定期	「堂の坂」
20. 千町	愛媛県 西条市	不定期	「千町」
21. 貝ノ川	高知県 津野町	10月	「棚田キャンデラまつり」収穫後に行われる。
22. 土谷	長崎県 松浦市	9月	「土谷棚田の火祭り」約3,000本もの灯籠に火が灯される。現在全国各地の棚田で行われている灯りイベントは、2003年に地域の活性化につなげたいという思いから漁火にヒントを得たこの土谷棚田から始まったとされている。2012年には「日本夜景遺産」に認定されている。
23. 春日	長崎県 平戸市	11月	「春日の祈り」7000個のLEDによるライトアップ。
24. 浜野浦	佐賀県 玄海町	10月、翌2月	「結ぶ繋ぐあかり」4色に輝く約1万4000本のLEDライトが棚田のあぜに設置されて、日が落ちると自動点灯。2022年より開始。
25. 松谷棚田	熊本県 球磨郡球磨村	3月20日	「松谷棚田竹灯ろうの夕べ」1500本の竹灯籠。※2月「くまむら灯籠祭」
26. 番所	熊本県 山崎市	2020年10月18日のみ	「棚田の灯り」新型コロナの終息を願い実施。
27. 寒川	熊本県 水原市	5月下旬	「棚田のあかり」竹筒器・稲わらの心・バイオディゼンセル油による2000本の灯り。
28. 八重	鹿児島県 鹿見島市	12月中旬～翌2月中旬	「八重のきらめき」LEDソーラーライトのイルミネーション。

表2

いるものは、中山千枚田の「中山虫送り」のみである。さらにこの中山虫送りの、その方法は松明を持ち行列で棚田の字を練り歩くという一般的な虫送り行列の形式であり、これが棚田で行われている様子が結果的にライトアップとして捉えられているというものである。中山虫送りでは他のライトアップイベントのように意図して棚田の一面にキャンドルを並べるといことはしておらず、その様相は実質的には異なったものであると言える。つまり、儀礼的な虫送り行列の形式と棚田のライトアップを伴う行事、イベントは現在においては丸山虫送りのみということである。

### 伝統行事としての機能

丸山虫送りが全国各地で行われているライトアップイベントと大きく異なる点は、前述のように、この行事が地域の伝統行事という認識で行われている点である。ある地域で行われる祭礼の有する機能について、森田三郎は文化人類学の観点から、定期的な儀礼、祭りの実施は、集団内の秩序の再確認、集団の維持、存続という効果を意図して行われるものであり、「社会あるいはコミュニティにおける自己の位置づけ、いいかえると現在の人間関係のネットワークのなかに意味のある存在として自分を再発見する（中略）結果として住民の連帯を実現してきたのである」と説明している<sup>(30)</sup>。また、武田俊輔は「祭りの特性を機能面から捉えていくと、共同体の構成員が祭りの遂行のために互いに協力し合い、祭りならではの非日常的な空間を共有する。その中で、ともすれば日常生活を続けるうちに薄れがちになる、共同体としての一体感を取り戻す」と述べている<sup>(31)</sup>。これらの認識に基づくならば、丸山虫送りはその伝統行事としての機能が集団内の秩序の維持や存続の機能を担っており、その継承が活動を一にしている棚田保全の維持や存続に直結していると言えるだろう。小木曾裕紀は、丸山虫送りと同様に棚田において虫送りを行なっている小豆島町中山地区において、虫送りや農村歌舞伎などの伝統行事が地域住民の結束を強め、さらにはこのことが棚田耕作の促進に結びついていることを、地域内側の立場から述べている<sup>(32)</sup>。紀和町地域においても虫送りの他に、8月の「紀和の火祭り」、鉱山産業が興隆していた時代の「山神祭」にルーツをもち昭和16年（1941年）より継続されている「紀和ふるさとまつり」、後述する自転車競技の大会「ツール・ド・熊野」などが年中行事、イベントとしてあり、これらの行事における相互協力によって地域の住民の連帯と地域行

事、伝統行事継承の意識が醸成され根付いていると考えられる。特に虫送りと紀和の祭りについては内容こそ異なるが、時期の近さに加えて北山砲が共通して使用されることから一連の行事としての認識があるようであり、このような一定の期間内に行事が連続して行われることも相互の継承意識の持続の要因として考慮されるべきであるだろう。明確な効果や実感を伴う観光化は行事の現代における継承において重要な側面であるが、同時に地域における伝統行事の認識と継承こそが地域集団において重要な要素であると筆者は考える。

### (3) 行事の継承

#### 行事を支える地域ボランティア

丸山虫送りを運営する組織については前節にて述べた通りであるが、実質的な行事の活動に欠かせない存在は、地域のボランティア団体「ふるさとボランティアクラブ」や、他のイベント団体などの地域のコミュニティである。ふるさとボランティアクラブとは、熊野市地域で行われる行事全般をサポートするボランティア団体であり、現在は40名程度の地域住民で構成されている。前進は「ふるさとキャラバン」という劇団であったが、高齢化などの要因から町のイベントなどができなくなったことを契機に「みんなで協力してやっぺいこう」という想いのもと現在の形となった。団体は行事自体にはもちろん、当日の駐車場の管理や交通整理などにも尽力しており、虫送り実行委員長の新谷さんは「ボランティアの協力がないと行事の継続はできない」と断言するほど、その活動は大きな支えとなっている。

また、他のイベント団体との相互的な協力も、行事の継続には欠かせないものとなっている。例えば、熊野市では例年5月下旬から6月上旬に自転車競技の大会「ツール・ド・熊野」が4日間かけて行われるが、棚田保全団体や虫送り実行委員会の人員は開催の際にはそちらのサポートも行っており、その代わりに虫送りが行われる際にはツール・ド・熊野の運営団体が虫送り行事をサポートするというような相互関係を築いている。しかしながら現状はそれでもスタッフ不足の問題を抱えており、一時期他地域からのボランティアを募ったこともあるが、ボランティアに一から作業内容を教えたり、活動中の身の世話をする負担の大きさから、現在は身内の人員のみで行わざるを得ない状況になっているという。

## 現状の問題点、課題

丸山虫送りには毎年多くの人々が訪れ、多い時は1000人以上もの訪客があり地域にとっては一大イベントとなっている。しかしながら、地域自体にその需要が直接的に還元されている割合は少なく、これは普段の棚田自体への訪客の際にも同様であるという。典型的な中山間地域である丸山地区の周辺には、お土産屋などの店舗もなければ、以前は運営していた宿泊施設も現在は閉業している。また、観光客の大半は交通手段として車かツアーバスを利用しているため、宿泊などの需要が他地域に流れるばかりでなく、交通規制や駐車場の管理などの負担ばかりが地域にのしかかっている現状があり、観光行事化してからは、むしろ地元住民が来づらくなったという声もある。千枚田で獲れた米や、米から作ったどぶろくなどは、道の駅や熊野市駅前などで委託販売しており、通販などでは10月から販売したものは年内には売り切れるほど盛況であるとのことだが、棚田の周辺では運営の負担から販売を行っていない。行事の際にはふるさと公社が焼き鳥を焼いたり飲み物を売ったり、募金を呼びかける活動も行っており、行列への参加資格として虫送り提灯の購入など実質的な参加費の徴収などは行ってはいるが、それらも微々たる収益であるといい、人手不足が深刻化している同地域において負担の軽減と需要の還元の仕組みづくりが重要な課題と言える。



写真7 虫送り提灯などの販売コーナー。  
募金等も呼びかけられていた。

## 結

本稿では、棚田の保全活動を先導してきた丸山千枚田において継続的に行われてきたにもかかわらず、これまで論じられてこなかった丸山虫送りの様相と変遷の動態を明らかにし、加えて行事の継承から生じる複数の要素が棚田保全に大きく付与していることを指摘した。丸山千枚田の保全活動は、棚田の価値が再認識

された90年代半ばにおいて先駆けて行われ現在まで精力的に継続されており、丸山虫送りはその一連の過程の中で復活したものであった。復活以降の丸山虫送りは、初頭には地域行事として行われていたものが後に観光行事化していった事例であるが、その継承は大きく2つの側面によって支えられていると考えられる。

1つは柵田景観を利用したライトアップによる観光行事化といういわば戦略的な側面である。地域では行事を単に集客を目的とした地域の観光イベントとしてのみではなく、ライトアップイベントが注目されることによる柵田自体の認知度を高めることと、そこから派生する柵田保全における主要な取り組みである柵田オーナー制度への誘致を期待しており、地域住民も行事によって柵田自体の認知度も向上したという実感を述べている。しかしながら一方で、観光客は行事をライトアップイベントの側面のみを目的として訪れており、行事の信仰や伝統の側面については認識が及んでいないという実態もあった。

もう1つの重要な側面こそが、その信仰と伝統性である。行事を主導する委員会の人々は柵田保全の活動意識とは切り離されたところで、行事の信仰と受け継がれてきた伝統行事としての意識を強く抱いており、それは2020年頃に発生したコロナウイルスの蔓延、いわゆる「コロナ禍」において、外部の人間が足を運べない状況においても継承のために行事を行っていたことなどからはっきりと現れていたものであった。石川県輪島市の白米千枚田で行われるイルミネーションイベント「あぜのきらめき」は本来LEDライトではなく、ろうそくを柵田一面に並べるイベントであったが、これを断念し一度限りのイベントとして行なわれることとなった大きな要因は人員不足など労力的な負担であり、つまりは地域に伝統性と協力体制の基礎がなかったことが大きな要因である。あぜのきらめきはその後、準備や管理の技術的な簡易化の方策によりこの問題を打開し、現在まで継続して行われているが、コロナ禍においては全国の多くの伝統行事、祭礼が中断を余儀なくされ、その中の決して少なくない地域では行事自体が中絶、廃絶に至ってしまった。その経過は様々であろうが、このこともまた、根底には行事を行わなかったことによる伝統意識や協力体制の減退、消滅が主な要因としてあり、そういった状況の中で丸山虫送り行事の継承を繋ぎ止めたものこそ、この虫送りの伝統行事という意識であったのだ。この意識は、虫送日も含まれる地域に根付いている年中の祭や行事に伴う協力体制の中で醸成されたものであると考え

られ、調査においても地域住民の胸中に、地域の伝統行事や地元の文化を継承していこうという強い意識が根付いていることを度々垣間見ることができた。このように現在の丸山虫送りは、内外の意識の相違を伴いつつも、地域における伝統行事と観光の側面、棚田保全の役割を担い、組織同士の連携の中でバランスを保ちながら現在まで継承されているのである。

## 注

- (1) 山路永司「棚田と景観」(棚田学会・編『棚田学入門』、勁草書房、2014年、134p)
- (2) 中島峰広『棚田保全の歩み: 文化的景観と棚田オーナー制度』(古今書院、2015年、2p)
- (3) 中島峰広『日本の棚田: 保全への取組み』(古今書院、1999年、91p)
- (4) 前掲(2) 137p
- (5) 春山成子・三浦正史「福岡県星野村内地区の棚田景観認識」(棚田学会『日本の原風景・棚田七号』、2006年、62～64p)
- (6) 前掲(3) 92p
- (7) 前掲(3) 92p
- (8) 本中眞「棚田の顕彰」(棚田学会・編『棚田学入門』、勁草書房、2014年、184p)
- (9) 稲垣栄洋、大石智広、松野和夫、高橋智紀、山内達仁、岩崎邦彦「地域資源としての棚田を活用した静岡県における新しいグリーンツーリズムの取組み」(日本学術会議協力学術研究団体 総合観光学会『総合観光研究』、2009年)
- (10) 小林駿司、宮脇勝「鴨川市大山千枚田の風景保全のための意識と課題に関する研究」(公益社団法人 日本都市計画学会『都市計画論文集 49』、2014年)
- (11) 大澤啓志、河原菜月「放棄棚田法面のヒガンバナ群生地化による半自然草地保全に関する研究」(棚田学会『棚田学会誌 23』、2022年)
- (12) 前掲(2) 135p
- (13) 山下博之「石川県輪島市白米千枚田における観光と保全」(棚田学会『棚田学会誌 15』、2014年)
- (14) 認定NPO法人棚田ネットワーク「棚田NAVI」(<https://tanada-navi.com/news/info/>、2024.4.10閲覧)
- (15) 浅田大輔「共生の場としての棚田」(棚田学会・編『棚田学入門』、勁草書房、2014年、105p)
- (16) 一般財団法人・熊野市ふるさと振興公社「丸山千枚田」(提供資料、1p)
- (17) 「丸山の千枚田」(紀和町史編さん委員会編『紀和町史 下巻』、紀和町(三重県)、紀和町教育委員会、1993年、763p)
- (18) 前掲(17) 768p
- (19) 前掲(3) 137p
- (20) 棚田学会第八回シンポジウム「棚田と文化的景観」(棚田学会『日本の原風景・棚田 8号』、2007年、18p)
- (21) 前掲(16) 3p
- (22) 小倉眞、小野寺淳、青木幸代「丸山千枚田の文化的景観とその保存の実態」(茨城大学『茨城大学教育学部紀要 五十八号』、2009年、41p)

- (23) 前掲(2) 152～156p
- (24) 前掲(22) 44p
- (25) 論中の「伝統行事」という呼称については、次のような資料から地域住民の認識によるものとして用いる。1.長野秀信「丸山千枚田」(棚田学会『棚田学会通信 第41号』2013年、3p)  
2.丸山千枚田公式HP (<https://www.maruyamasenmaida.jp/post/>丸山千枚田の虫おくりについて、2024.6.10閲覧)
- (26) 熊野市地域振興課「令和5年度 丸山千枚田の虫おくりの概要」(行事の際に配布される資料より)
- (27) 「紀和町の民俗」(紀和町史編さん委員会編『紀和町史 別巻』、紀和町(三重県)、紀和町教育委員会、1994年、192p)
- (28) 調査において直接話を伺った人物については、敬称をつけて表記する。
- (29) 農林水産省「棚田キラーコンテンツ化促進ガイド Ver.1.2 ～ 棚田を核に地域おこしに取り組む事例の紹介とその分析を通じて ～『丸山千枚田』」(<https://www.maff.go.jp/j/nousin/tanada/attach/pdf/announcement-4.pdf> , 2024.4.10閲覧)
- (30) 森田三郎「イベントと祭り」(森田三郎・著『祭りの文化人類学』、世界思想社、1995年、119p)
- (31) 武田俊輔「祭りの継承にどのように向き合うか」(<https://www.andemagazine.jp/2022/08/25/japanese-festival-interview.html>、2024.4.10閲覧)
- (32) 小木曾裕紀「中山千枚田の伝統行事と棚田の耕作について」(棚田学会『棚田学会通信 第70号』2023年、6p)